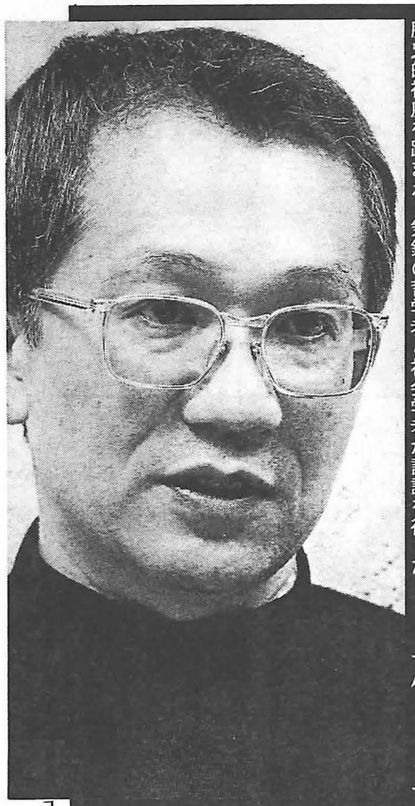
『エコノミスト』　第74巻第53号通巻3262号　1996.9.1.発行　pp.90〜95　毎日新聞社

1996-38

対談

現代の社会理論は人間を幸せにできるか

社会学（社会科学）は複雑化する現実を前に、決定的な理論を打ち出せないでいる。理論は人々がよりよく生きるための社会的〈公準〉の前提となるが、それはどう確立されるべきなのか。歴史的視座を踏まえ、気鋭の哲学者と社会学者が討論を行った。



橋爪大三郎

たけだ　せいじ　明治学院大学教授　一九四七年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。自分を深く知るため、〈他者〉とかかわるために哲学する思想家。著書に『現代思想の冒険』など。

はしづめ　だいさぶろう　東京工業大学教授　一九四八年生まれ。東京大学大学院博士課程（社会学）修了。〈言語派〉社会学の確立をめざす社会学者。著書に『言語ゲームと社会理論――ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』など。

竹田青嗣

竹田　最近、社会学をはじめとする社会科学への信頼が揺らいでいるように思います。こう考えれば社会の問題を原理的に考えられるという説得的な理論がなくなったという事情があるかもしれません。そこで、橋爪さんに現在の社会科学の基本的な考え方がどうなっているのか、理論と現実との関係はどうかなどについて伺いながら議論を進めたい。

その前に、私なりに現代の代表的な社会理論について大まかなスケッチを試みてみます。

まず、ポスト・モダニズムの考え方がある。これは、基本的に社会の制度を解体していこうとする理論ですが、反社会的なラディカリズムが核にあって、具体的な社会の改変のプランはほとんど持たない。それから、ロールズの「正義論」のように、民主主義を基本前提にしながら、弱者救済や格差是正を主眼に置く考え方もある。一方、ノージックなどは、国家不要論を軸に「新自由主義」（リバタリアニズム）を標榜している。この両者の考え方に異議を唱える理論もある。マッキンタイアらの共同体派で、彼によると、ロールズやノージックの議論は自由な近代的個人が社会をつくりあげているというフィクションが前提になっている、と。人間というものは、実は共同体に内属しているのであって、そういう視点が全く抜け落ちている、と言う。

もう一つは「世界システム論」。これは従属理論のバリエーションと言えます。この考え方の基本は、マルクス主義が、資本家と労働者の対立が調停不能であると考えたのを世界大に移したことです。資本主義制度の中にあっては、先進国と後進国との格差は縮まらない、資本主義は矛盾を抱えたまま進んでいくと主張する。ウォーラーステインが主唱者だが、では、どうすれば資本主義の矛盾は解決されるのか、という点では先が見えない。現在、社会理論として主だったものを挙げましたが、新たな展望を切り開く理論がないのが現状だと思います。

橋爪　展望がある理論がないということに同感です。竹田さんが整理されたさまざまな理論は、社会科学のプロなら誰でも知っているものですが、このどれかを勉強すればたちまち展望が開け、社会科学が社会の問題を解決することができるといったものではないんですね。だから、これらの理論のどれかにぞっこん入れ込んでいる人を、私は信用することができないんです（笑）。こうしたことを踏まえた上で、まだ残っている問題について考える。これが社会科学の課題と言えるでしょう。

いま述べられた諸理論のベースにあるのは、モダニズム（近代主義）です。これは評判が悪いが、現代社会を動かしている支配原理です。新民主主義、新自由主義、共同体派――どれもモダニズムというコップの中の嵐で、いわばモダニズムの尾ヒレにすぎない。それほどモダニズムの存在は大きいのです。それは社会のさまざまな伝統を踏まえており、まだまだその中に多くの知恵が残されていると思います。

モダニズムに反対している最大の勢力はマルクス主義でしたが、マルクス主義の限界が明らかになったところで、そこから逃げ出す人たちが出てきた。これがポスト・モダニズムであって、いろいろ主張はしているが、「マルクス主義はもう古い」というのが彼らの本当に言いたいことです。そして、彼らには大きなトラウマ（心的外傷）がある。モダニストにも、マルクス主義者にもなりきれなかった、という…。そのマルクス主義が凋落したいま、ポスト・モダニズムも力を失っていくのだろうと私は考えています。

モダニズムと国家

橋爪　もうひとつ、マルクス主義が効力を失った後、そのリバイバル・バージョンとして出てきたのが従属理論。これは、中心・周縁理論からきているが、端的に言えば階級闘争の理論を国際関係にあてはめただけと言える。先進資本主義は資本家、第三世界は搾取されている労働者、というアナロジー。ところがマルクスの『資本論』には、そう書いてありません。だから、先進資本主義国が第三世界を搾取しているという経済学的証拠はない。それなのに、そう断定する。これが従属理論の中身だと思います。アイデアとしては面白い。しかし、そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないという曖昧さが残る。

いま挙がらなかったもう一つの可能性としては、モダニズムとポスト・モダニズムに両股をかけた「社会システム論」がある。主唱者はルーマンらで、新しいシステム論にのっとり、社会科学をやろうとする一派です。日本でもこのグループは大きな力を持っていて、さまざまな主張をしている。しかし、解釈はしても、現実的な提案はできていないという意味で、竹田さんの挙げられたグループと大差はないと思います。

このように、さまざまな新しい試みはなされてはいるのです。ただ社会の現実を切り開き、それを先に進めていくという決定版はないのですね。とは言え、これは社会科学が足踏みしているとか力を失っていると見るべきではないと思います。いろいろの努力が積み重ねられているという意味で、それぞれの理論は評価するに足るものだと考えます。

竹田　モダニズムがさまざまな理論のベースにあると言う場合の、「モダニズム」について一言説明してください。

橋爪　いろいろに言えますが、簡単に言えば、市民社会であることを前提に、経済的には資本主義的市場経済の徹底、政治的には民主主義の貫徹。

竹田　僕の見方では、近代になって現れたロックやルソー、カントやヘーゲルによって打ち立てられた新しい社会理念ですね。

モダニズムを近代市民社会の原理だと大づかみに言うと、二〇世紀に至ってそれは破産した。なぜかと言うと、市民社会の原理は国民国家の原理にのみ込まれて、国民国家同士が戦争し、かつ先進の国民国家が弱い国家を植民地化し、ひどい矛盾を引き起こした。これはある意味で市民社会原理というモダニズムの破産であると言える。近代市民原理の前提には、人間の欲望の解放ということがあったのですが、その行き着いた先は、国家同士の戦争だった。

そこで出てきたのが自由競争と私有財産の否定を柱とするマルクス主義です。モダニズムがもたらした国家拡張の原理は、自由競争の否定によってしか解決できないと考えた。ところが、そうした試みは簡単に成功しない。人間の欲望はいったん解放されているわけで、それを抑える必要があるのだけれど、そのためには異様に強力な権力が要請される。だから社会主義国家は、どうしても一つの絶対的に正しい考え方によって強大な権力を正当化する以外に方法がない。だから、どんな社会主義国でも、社会はこうなるのが最も正しいあり方である、従って、それに反する人間は誤った人間で罰せられなくてはいけないということになる。

プラトニズム批判

竹田　つまり、正しい考え方が一つであるということによって、社会主義権力の正当性が守られるという原則なんです。それを強行しようとしてマルクス主義はどん詰まりまでいってしまった。そこで私としては、もう一度、モダニズムの考え方の原点に立ち返って考えてみると、大きな可能性があるのではないかと考えています。橋爪さんはモダニズムを現代を動かしている支配原理と言われたが、その意味で同感です。

橋爪　マルクス主義は社会科学を名乗っていたが、社会科学の考え方と大変違っていたと私は考えています。マルクス主義の前提によると、社会を貫く客観的法則があって、それを認識したものが真理をつかむという構造になっている。しかし社会科学は、そのような絶対の法則が社会を貫いているとは考えない。むしろ、社会についてさまざまな仮説をみなが提案している状態が正常だと考える。社会は人の考え通りに動くわけではないが、そこには何らかの客観性、法則性がある。社会のすべてが解明されているわけではないにしても、十分、科学的説明がつき、予測できる場合があるのです。

では、文学や芸術といった人文科学と社会科学はどう違うのか。人文科学は、人間が生み出したもの（アウトプット）を別の人間が受け止め、それを真剣に考える学問で、人間対人間のキャッチボールと言えるんですね。

社会科学は、これとレベルがちょっと異なる。大勢の人間が集団を成したときに生まれる客観性を問題にする。人間一人一人の「個性」は消えるが、個人を扱っていたときには見えなかった法則性が現れてくる。それを手掛かりに考えていくのが社会科学です。それが結局は一人一人の人生を豊かにする、幸福を追求することにつながるという確信に支えられているのは言うまでもない。

しかし社会科学が本当に社会の真実を解き明かしたとして、一人一人の幸福に必ず結びつくかというと、そうじゃない。そこには、さらに人々が知恵をいかに出し合うかという問題があるからです。一人一人が賢明に行動するかどうか、社会科学はこれを取り扱わないのですね。社会科学と人文科学の共同作業が必要になるのは、このあたりではないでしょうか。

竹田　これまでの社会科学の理論には、理想社会を追求するという基本的性格があったと思います。よい社会をつくりだせば、人間は幸せになれるのだという確信ですね。キリスト教がその始まりで、マルクス主義は、その最終形態だった。

ところが、そうした考え方に対し、マルクス以前に二人の批判者がいた。ニーチェとヘーゲルです。ニーチェによると、そういう考え方はプラトニズムであると。社会に矛盾があるとき、その現実条件を直視しないで、絶対理想状態を想定して、そこからすべてを考えようとする。それだと思想として弱くなる。なぜそういう考え方になるかというと、ルサンチマンからきているという言い方をしている。ニーチェのプラトニズム批判は、社会科学の理論にとって大きな試金石になっていると思います。

一方、ヘーゲルも近代的な理想主義を厳密に批判している。近代の倫理の考え方では、人間の「個別性」は、「社会性」によって乗り越えられなければならないとされてきた。「みんなのために」というモラルが「私のために」を乗り越え、みんなが他者や全体のことを考えなければいけない、と。これに対しヘーゲルは、人間が「個別性」を保ちながら、しかも「社会性」を生かしうる、そういう社会のあり方を原理的に探究することが決定的な問題だと言っている。

この二人の考え方はモダニズム思想の中で傑出したもので、この考え方をマルクス主義はもちろん、現在のさまざまな社会理論もうまく取り込んでいないと思います。

肝要なのは、社会の問題の課題は一人一人の人間の生活にとっての社会的・経済的条件を整えるということであって、個々人を幸せにするということではない。つまり、人間一人一人が頑張れば幸せになりうる条件が備わっているかどうかが社会の問題です。社会が人間を直接幸せにする、そういう社会を構想すると、非常に厄介なことが起こってくるということですね。

国家をなくすためには

橋爪　モダニズムは、いままで出てきた社会科学の理論の中でいちばんシンプルで強力だという点はいいのですが、根本的な問題もいろいろ抱えている。それは、さっき国家間戦争のところでも出てきた国家の問題なんです。市場経済、資本主義といったものは、本来、国家の存在を必要としない。国家などないのが完成した形態です。

ところが近代社会は、人間が同じ条件で同じ人間として認め合うことをめざしたのですが、その過程で、自国民と他国民とか、先進国と第三世界とかといったまとまりをつくってしまわざるを得なかった。国民国家が歴史的必然として出てきてしまったのですが、モダニズムはそのことを正当化できないんですね。

なぜ国民国家が形成されたか。一つの可能性は、近代社会の考え方がキリスト教の文化的伝統の中から出てきていることに関係するかもしれない。キリスト教では、もともと教会は「一つ」、つまり理想的人類は世界で「一つ」としながらも、実際には国家はいくつもある。キリスト教徒は別々な国家で別々な法律のもとで生活していいのです。ゲルマン人もノルマン人も、キリスト教に改宗する過程で昔の伝統を引きずり、政治的なまとまりから脱しきれなかったのです。

では、国家を解消するにはどうしたらいいか。それには国家が成立した条件、文化的差異、経済の発展段階の違いなどを消去していくしかない。わかりやすく言えば、世界で通用する言語をたとえば英語にする。みんなジーパンをはき、コカ・コーラを飲み、所得がみな一定レベル以上になる。こういうことが起こらない限り、国家はなくなっていかないという宿命をいまのシステムは持っているわけです。

竹田　なぜ国家がなくならないのか。

ある権力のもとに一定のルールが通用しているのが国家の範囲ですね。そこで国家にはある意味での均質性が必要なのだが、そこへ異なる宗教が入ってきたりすると困難が生じる。なぜかというと、もともとあった「共同性」と新たに形成された「共同性」の間に対立や差別が生じ

るからです。だから大きなまとまりが揺らいでくると、すぐに小国家が群立してまた抗争する。人間は共同体単位で生き、共同意志や、さらには共同幻想のもとに生きせめぎ合っていますが、この共同幻想は、そうたやすくなくなるものではない。だから、国家がその領域を超えて広がっていく上での大きなポイントは、宗教的、文化的、そして言語的な共同性が取り払われるか相対化されることです。国家同士がそれぞれ市民性を高めていくとか、国家間の上下関係を解消していくとかしないと、破れない構造になっている。要するに、社会における共同性（共同幻想）――完全になくすのは難しいが――を相対化する道筋が見えないと、国家の枠組みを取り払う原理が見えてこない。

幸せの物質的側面

橋爪　社会科学が取り残している問題――人間の生き方と社会科学の結論との間のギャップ――は、二つくらいあると思う。

一つは、人間が幸せになるといっても、人間も物質的存在ですから、物質的条件の中で生き、それで幸せになるしかない。こうした物質的制約があるけれど、自分の幸せが何であるか、それを決めるのは要するに考え方なのですね。

たとえば、ある社会に、物質的豊かさはどうでもいいという幸せの定義があるとすると、それ以外の尺度で人間の幸、不幸を決めているに違いない。だから、何が幸せかという定義が幸せになるための方法論として不可欠なのではないかと思います。しかしこれは、社会科学の中で決まるのではなく、その外側で決まる問題だと思う。

人文科学にとって永遠の問題と思われることがあります。ある人が物質的条件の中で幸せになると決めたとします。そうすると、その人は自分が幸せになるためにできるだけモノを独占しようとする。そして、他人が不幸になるのはかまわないと考えるに至る。こうしたことを人文科学はどのように捉えているのですか。

竹田　それは哲学の分野に考え方の長い伝統があります。たいていは、欲望を滅却するというのが主流ですね。

橋爪　自分のことだけ考えているようでは、欲望のレベルが低いという考え方ですね。哲学者に言わせれば、物欲が満たされるだけでは幸せになれないと…。

竹田　それだけじゃ、相対的な幸せにすぎないというわけです。物質への欲望というのは相対的なものだから、その欲望に捉われている限り、つねに不満や苦しみがある、と。ただ私は欲望を滅却するのではなく、バランスを見いだすことが大事だと思う。

橋爪さんも言われる通り、人間一人一人の幸福の形は異なる。そのことを前提にして、矛盾や不満が生じたとき、それがいつでも表現され解決されうる可能性がある、そういう社会の条件をまず取り出す必要がある。

ただ人間の欲望といっても、つき詰めていくと、それは自分のアイデンティティーや自我を通じ、自分自身を肯定したり生きることに元気が出る方法を見つけようとする営みと関係している。だからモノや富の配分の問題だけでなく、他者との幻想的な関係性の問題が、哲学ではとくに重要になる。

橋爪　そういう哲学の努力は尊重しますが、私はそれだけでは満足できない。なぜかというと、世の中が「意味」からだけできているのであれば、それが充実するように考えていけばいい。つまり、竹田さんが言われたことで十分だと思います。しかし人間は意味によって生きると同時に、物質によっても生きている。私はもともと言語派社会学という立場から、言語と社会の関係を考えているのですが、言語は意味だけでできている。しかし社会は意味と物質でできている。その両面から社会を捉えたいというのが課題としてある。

言語学者のソシュールは「意味」について徹底して考え、それは物質から切断できると主張しました。これを「恣意性の原理」と呼びます。彼がそういうアイデアを発明したから言語学が一つの科学になり、人文科学の中核になった。そしてそこから、記号論も構造主義もポスト・モダンも出てきた。私はこういう系譜で勉強しながら非常に不満足なのは、社会は意味でできているけれども、「恣意性の原理」が成り立たないと思われること。

たとえば、肉やコメをもらったとします。それは意味の側面からはうれしいでしょうが、しかし食べれば栄養になり、自分の体をつくるという物質的現実もある。その物質（性）について社会科学は扱っていかなければならない。だから人間の幸せについても、意味と物質の両面から考えることが大事でしょう。

「いい」という公準

竹田　それは全くその通りで、私も世界が意味からだけできているとは思わない。肉やコメを誰かが取ったら誰かが食いっぱぐれて死んでしまうとか、あるいは上手に分け合うことができなければ殺し合いが始まる、それが人間の社会の歴史の基本事実であって、それをどう処理するかに、社会科学の基本の課題があった。

ただ、そうして社会に出てくるトラブルや矛盾をどう解決していくかということは、人間関係の中で、相互の納得を取り出していく仕方以外に道がない。絶対的に正しい考えというものは原理的に存在しないわけです。すると、たとえば社会主義のように、絶対的な正しい考え方というのではなくて、人間同士で、これはよいとか、これは本当だとか、その了解が取り出されることの可能性の原理についての考察がなければ、社会学や社会科学は、うまく公準をつくり出せないで、つまりどんどん相対主義や懐疑主義が広がっていくと思うのです。社会学や社会科学と、哲学や人間の学とでは、対象領域に相当の違いがあるけれども、その中心部分には切り離し得ないものがある。つまり、「よい」とか「悪い」とかの価値の問題ですね。

橋爪　「よい」「悪い」は、たぶん人類に共通の公準と思いますが、具体的な社会をつくるとなると、「よい」とは何か、「悪い」とは何かを具体的に問い、そこから個別の制度がつくられ、社会が動き始めるのだと思う。

現在、社会科学は、どんな公準があるかということは列挙できるけれど、ある公準がある公準に比べて優れているということは言えない状態だと言えます。悪く言えば混乱状態にあるが、社会科学にその公準を整理する力はない。それは、人々が実際にこの公準が「いい」と言い出した時に選ばれるのだと思います。

財界

「経営は人なり」――昭和28年、三鬼陽之助の創刊以来
経営資源の「ヒト」を中心に
誌面づくり。変革期の
ヒューマンドキュメントを掲載！

●「なぜシリーズ」（本誌主幹 村田博文）
（産業界が直面する問題を分析）
●「提言シリーズ」
（財界人、経営者は何を訴えるか）
●話題の経営者に鋭く斬り込む
「財界レポート」
●起業家群像／出でよ起業家！

購読お申込はフリーダイヤルで
0120 FreeDial 0120-34-3191（ザッシ ザイカイ）
株式会社財界研究所
東京都千代田区永田町2-14-3